

平成 30 年 6 月 27 日現在

機関番号：50104

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02811

研究課題名(和文) 焦点化したライティング指導の効果と英語学習の動機づけレベルに関する実践的研究

研究課題名(英文) An Empirical Study of Writing Instruction Focusing on Cohesion and Coherence in Reference to Motivation for Learning English

研究代表者

鈴木 智己 (Suzuki, Tomoki)

旭川工業高等専門学校・一般人文科・教授

研究者番号：70342441

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：初級英語ライティング学習者に対して行う結束性と首尾一貫性に焦点をあてた指導がライティングの質に与える効果を、英語学習に対する動機づけ、ライティングに対する不安、ライティングの際に用いる方略使用および英語熟達度といった個人差要因との関連において検証した。各指標に関する質問紙調査と英語熟達度テストを実施し、パラグラフ・ライティングの総合的な質と首尾一貫性について評価したところ、ライティングの質および各個人差要因の指標において有意な効果は何れも得られなかった。しかしながら、全体的な文章構成の計画に関する方略使用と指示を表す結束性を示す語彙の使用数、およびライティングについての自己効力感が改善された。

研究成果の概要(英文)：This longitudinal study explored the effects of writing instruction focusing on cohesion and coherence on the quality of novice EFL learners' expository writing, in relation to individual learner differences such as motivation toward English learning, writing anxiety, writing strategy use, and L2 proficiency. The participants were 94 Grade 12 Kosen students attending a semi-writing-focused English course. The research instruments were questionnaires, a standardized proficiency test, and two take-home paragraph writing tasks, each of which was evaluated by three raters for its overall quality and coherence. Contrary to expectations, the results showed no significant improvement in scales in motivation, overall quality, coherence, and writing anxiety. The only immediate effects observed were the participants' more careful use of "global planning" and their improved self-efficacy in writing, the latter of which was supported by the answers to an open-ended retrospective survey.

研究分野：英語教育

キーワード：ライティング 動機づけ cohesion coherence 個人差要因

1. 研究開始当初の背景

(1)かねてより高等専門学校生(高専生)の英語学習に対する動機づけの低さや英語能力の低さが指摘されている。また動機づけの低さなどの個人差要因をもつ学習者に対する英語教授には多くの困難があり、学習効果を得ることは容易なことではない。そのため、英語学習に対する動機づけの低い初級学習者に対するライティング指導の効果についての研究はほとんど行われていない。

(2)日本における英語ライティング指導では、元来、言語形式面における「正確さ(accuracy)」を重視した文の書き換えや、和文英訳が中心となってきた。しかし情報化やグローバル化が進んだ現在においては、英語を用いて情報発信ができる実践的なコミュニケーション能力の育成が急務となっている。こうした状況を受けて、情報発信力の育成のためにライティングの指導方法も意味内容を重視したものへの転換が要求されている(森、2014)。

(3)初級英語ライティング学習者に見られる特徴として、Sasaki (2000)はひとつの意味的なまとまりを書き終える度に書くのをやめ、その内容をそのまま翻訳する傾向が見られるとしている。また、このような傾向は英語の習熟度の低さと関係があると報告されている(Sasaki, 2000; Hirose, 2005; 沢谷, 横山, 2007)。

(4)ライティングの評価に関与する要素が多岐にわたる中で、coherence やパラグラフ内やパラグラフ間のつながりがライティングの質に貢献している比重が大きいという先行研究がある(Kobayashi & Rinnert, 1996; Hirose, 2005)。そのため、習熟度が低い初級の学習者に対しても cohesion (結束生) や coherence (首尾一貫性)、そしてライティング・ストラテジーを明示的に指導することがライティングの質を高める上で有効であると考えられる。

(5)意味内容を重視したライティングを行うためには言語形式だけではなく、「内容」や「構成」といったライティングの全体に関わる(global)な側面に対しての指導が必要となる。本研究の実践・研究を行った高専では、3年次でライティングに関する授業を行っている。その授業では、基本的な文法や構文の運用力を高めるとともに、さまざまな語彙・表現を身につけることを基礎段階の目的とし、またその応用段階においては、cohesion や coherence に留意したパラグラフ・ライティングができることを目指している。この2つの観点に焦点を当てた指導を始めたのは、従前の指導では、機能シラバス、トピック・シラバスなどに基づいて作られた教科書の中で示される形式を用いることに

重点が置かれ、センテンス・レベルのライティングにとどまることが多かったためである。その結果、既習の各要素を結びつけてパラグラフ・レベルで内容や文と文のつながりに留意して書くということを意識させることが困難であった。実践の対象となる学習者はこれまで英語ライティングの学習経験が乏しく、この授業および実践で初めてライティングに本格的に取り組むこととなった。

2. 研究の目的

(1)本研究では、英語学習に対する動機づけが総じて低い学習者に対して cohesion と coherence に焦点をあてたライティング指導を行い、ライティングの質にどのような変化が生じるかその効果を明らかにするとともに、英語学習に対する動機づけやライティングに対する態度にどのような効果をもたらすかについて検証する。日本の中等教育における英語教育ではライティング指導、とりわけ実際にパラグラフ・ライティングに取り組む機会が非常に限られている傾向があることからライティングに対して不安を抱いたり、ライティングに対する動機づけが弱い学習者が多いと考えられる。しかし、実社会では実践的なコミュニケーション能力がますます重要視される傾向にあり、特にスピーキングのみならずライティングによる情報発信能力も求められている。そもそも学習の成否には個人差要因が大きくかかわっているため(田中他、2007)、ライティング能力の向上には、効果的なライティング指導方法の確立はもとより、学習への動機づけを高めるような教育的介入が不可欠となる。本研究ではそうした教育的介入の可能性を探る。

(2)ライティングにおいて cohesion と coherence を高める明示的指導を行い、ライティングの質に及ぼす直接的な効果を検証する。

(3)英語による情報発信能力を向上させることを考えた場合、即時的にその場で発話・発信することが求められるスピーキングとは異なり、情意面での負担が比較的少ないライティング能力を高めることもひとつの方策であろう。そのため、本研究ではライティングの指導を通して学習者の動機づけなどの情意面でどのような変化が生じるか検証する。

3. 研究の方法

(1)H27年度は3つの質問紙を予備調査として行った上で本調査で用いる質問項目を決定することとした。まず、研究協力者の英語学習に対する動機づけを測定する質問紙には鈴木(2014)の研究で用いた項目を中心とした34の質問項目を用いて因子分析を行い、抽出した因子を構成する項目を残し、新たな項目を加えると同時に回答に偏りの大きい

項目を削除するなどして本調査で使用する質問紙を確定した。また、ライティングに用いる方略についての質問紙は山西 (2009 他)、ライティングに対する不安についての質問紙は Cheng (2004) の研究で用いられた項目を採用して作成した。

(2) H28 年度はライティング指導の実践および本調査を行った。まず、研究協力者の英語学習に対する動機づけを測定する質問紙 (項目数 31)、ライティングに用いるストラテジー (方略) を測定する質問紙 (項目数 9)、およびライティングをする際の不安を測定する質問紙 (項目数 16) を 6 件法で実施するとともに、与えられたトピックについて 100 語程度の説明文 (expository writing) を書かせる持ち帰り課題を課し (辞書や文法書等の使用を認めた)、これらを事前テストとして用いた。その後、「英語表現 I」の高等学校検定教科書を用いた授業を行いながら、書くこととする文章の目的と読み手を意識することの重要性、基本的なパラグラフ構成、情報の配置 (一般的なことからより詳細なことの順序) などパラグラフ・ライティングをする際に必要な基本事項について説明した。さらに結束性を構成する要素 (cohesive devices) の中から「指示」「接続」など文法的結束性を示すもの、次いで語彙的な結束性を示すものの働きを理解させた上で実際にそれらを用いた演習を行った。センテンス・コンパインング (複数の文をひとつにまとめること) やディスコース・マーカー (discourse marker: metadiscourse および transition words と同義) の使い方などについての練習も行い、これらすべてを cohesion と coherence を高めるために焦点を当てた明示的な指導として 9 ヶ月間にわたって断続的に行った。また、事前テストと事後テストの間にさらに 2 つのパラグラフ・ライティングの課題を与え、その都度フィードバックを与えるとともに必要に応じて書き直しを行わせた。年度末には、事後テストとして事前テストと同じ質問紙調査を行うとともに、事前テストと使用するレジスターや論理展開の方法 (patterns of organization) が大きく異なるように、トピックの一部のみを変えたほぼ同質の説明文のパラグラフ・ライティング課題を課した。

(3) H28 年度末から H29 年度には本調査で収集した各種データの分析を行った。ただし、3 クラス (約 120 名) を対象に実践を行ったが、分析にはすべてのデータが揃った研究協力者 94 名のデータのみを用いた。ライティング・プロダクト (以後: プロダクト) については、2 名の英語母語話者と研究分担者 1 名が Nakanishi (2006) で用いられた EFL Composition Profile を基に作成したルーブリックに照らし合わせて総合的質の評価 (overall quality) と首尾一貫性 (coherence)

について 6 点満点で評価した。また、プロダクトの結束的要素 (cohesive devices) の使用については接続詞と語彙的結束性について研究分担者 1 名がその総使用数およびその内正しく用いられているものの数を数えた。

4. 研究成果

(1) ライティングの質の評価について、評価者間信頼性は総合的評価で $\alpha = .836$ 、また首尾一貫性の評価では $\alpha = .766$ と分析に耐えるものであったが、パラグラフ・ライティングの指導を行う前後で比較を行ったところ数値は若干上がったものの有意差はなく、明示的なライティング指導による効果は得られなかった (表 1)。

項目	Pre-test		Post-test		t
	Mean	SD	Mean	SD	
Quality of Writing	3.67	0.91	3.78	0.73	-0.99
Coherence	3.84	0.94	3.95	0.74	-0.88

表 1

(2) 個人差要因のうち英語学習に対する動機づけとライティングに対する不安についてもライティングの質と同様に指導の前後で変化が見られなかった (表 2)。

項目	Pre-test		Post-test		t
	Mean	SD	Mean	SD	
Motivation	3.63	0.72	3.53	0.70	-1.60
Writing Anxiety	2.98	0.80	3.02	0.81	-0.51

表 2

(3) ライティング方略使用においては一貫性に欠ける結果となった (表 3)。3 つの下位尺度 (global planning: 全体的にどのように書くかを計画する方略、local planning: 書いている途中でその部分をどのように書くかを考える方略、review & revision: 読み返して必要に応じて書き直す方略) の総計では、指導の効果によって数値が上がるのが期待されたのにもかかわらず数値が有意 ($p < .01$) に減少している。ただし、global planning では有意に ($p < .05$) 増加しており、限定的ではあるものの一定の指導効果があった。これはパラグラフ構成 (主題文、指示文、結論文) や discourse marker などに關わる反復的指導の効果であると考えられる。

項目	Pre-test		Post-test		t
	Mean	SD	Mean	SD	
Writing Strategy Use	4.20	0.88	3.94	0.88	3.10 **
- Global Planning	4.25	0.99	4.48	1.04	-2.00 *
- Local Planning	4.47	0.89	4.40	0.99	0.80
- Review / Revision	3.67	1.26	3.78	1.17	-0.86

** $p < .01$ * $p < .05$

表 3

(4) 正しく用いられた結束性を構成する要素においてはさらに一貫性に欠ける結果となった (表 4)。総数ではやや増加しているものの有意差はなかったが、一方、下位尺度である「指示」を表すものでは 1% レベルで

使用数が顕著に増加、また語彙的結束性を表すもので5%レベルで微減と結果が分かれた。3つのカテゴリーでそれぞれ指導を行ったが、単語レベルでの呼応に依拠する「指示」は比較的理解しやすく実際に使用することも容易であるために増加したと考えられる。また、語彙的結束性を示す同義語・類義語については指導を行ったものの、そもそも研究協力者の語彙サイズが限られていると思われることと、許可されていた辞書使用も効果的に行うことができなかつたことが影響していると考えられる。

項目	Pre-test		Post-test		t
	Mean	SD	Mean	SD	
Successful Use of Coh. Devices					
Overall	7.55	3.17	8.41	3.42	0.23
- Reference	1.64	1.75	2.95	2.12	-4.48**
- Conjunction	4.97	2.41	4.89	2.36	0.23
- Lexical Cohesion	0.95	1.39	0.57	1.20	2.06*

** p<.01 * p<.05

表4

(5) 正しく用いられた結束性を構成する要素の数の事前テストと事後テスト間の変化と、プロダクトの総合的質の評価および首尾一貫性の評価との間の相関関係は表5のとおりであった。総合的質の評価と首尾一貫性の相関が極めて高いことから、首尾一貫性がライティングの質を決める最大の要素であることがわかる。また、調査した3つの結束性を構成する要素の内、「接続詞」の使用の増加だけに首尾一貫性と弱い相関が認められた。これは「首尾一貫性と総合的質の評価に高い相関があるが、首尾一貫性の評価は必ずしも結束性を構成する要素の使用で定義できるものではない」とする Crossley & McNamara (2001)の指摘と一致するものである。

Index	Quality	Coherence	Conjunction
Quality	1	.842**	.257*
Coherence		1	.263*
Conjunction			1

** p<.01, * p<.05

表5

(6) 事後に行った質問紙調査には「この授業で英語の文章を書くことができるようになったと感じる」、また、「この授業のパラグラフ・ライティングに関する指導は役立った」という振り返りのための2つの項目を加えた。それぞれ6件法の間値3.5を超える3.80と4.32となり、どちらもパラグラフ・ライティングに関する指導に一定の主観的効果、すなわち自己効力感の向上があり、指導の有用性があることを示した(表6)。

項目	Mot	Anx	Str	(GP)	(LP)	(RR)
書けるようになった (#77)	.206*	.118	.303**	.428**	.259*	.114
役立った (#78)	.413**	.128	.379**	.526**	.341**	.094

* p<.05

表6

(7) 事後に行った質問紙調査に加えて、「パ

ラグラフ・ライティングで最も向上したと感じるのはどのような点であったか」という質問に記述式で回答を求め、明示的指導の効果を自己評価させた。その回答の頻出語をテキスト・マイニング・ソフトウェアである KH Coderにより抽出するとともに(表7)、これらの語の共起関係を探索した(図1)。その結果、「文章」「構成」「書ける」という語が最頻出語となり、共起ネットワークにおいて中心性が高い共起は「文章・構成・書ける」、「接続詞・書ける・使う」、「英語・表現・使える・語彙」であった。このことと(6)に記した自己効力感の向上を示す指標と合致している。

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	文章	48	11	日本語	9
2	構成	33	12	一貫	8
3	書ける	21	13	語彙	8
4	表現	20	14	向上	8
5	文	18	15	辞書	8
6	考える	14	16	接続詞	7
7	使える	14	17	文法	7
8	英語	13	18	使う	6
9	使い方	11	19	力	5
10	意識	9	20	平易	4

表7

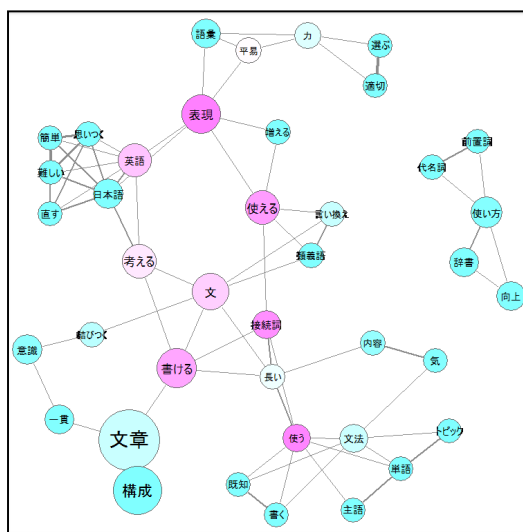


図1

(8) 《教育的示唆》
英語学習の4つの領域(話す、聞く、書く、読む)のひとつであるライティングにおいて、cohesionおよびcoherenceに焦点化した明示的なパラグラフ・ライティングの指導(他の要素についての指導を含む)を行うことで、ライティングに対する不安が軽減され、動機づけにも正の効果をもたらすと同時に、ライティングの質が向上するというモデルを想定した(図2)。これは Cheng (2004)が指摘した「L2のライティングにおける不安はライティングの自己効力感、ライティングに対する動機づけ、ライティング能力と負の相関がある」という考えに沿ったものである。今回の実践研究で効果が極めて限定的であった

理由は、授業で行う諸活動の中でパラグラフ・ライティングについての指導が占める割合、さらにパラグラフ・ライティング課題の評価が科目評価全体に占める割合（6%）が十分でなかったことの影響も考えられる。ひとつひとつの指導項目に対する具体的な反復指導（treatment）が不十分であった可能性があると考えられる。また、センテンス・レベルでの和文英訳や自己表現しか経験を有しない研究協力者のライティング能力を考えたとき、課題の負荷が高かった可能性がある。

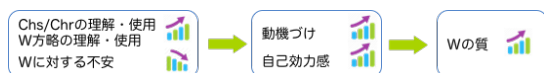


図2

(9)《今後の研究課題》

ライティング活動に限定せず、広く英語学習に対する動機づけを高める指導方法を検討することが研究課題となろう。

<引用文献>

- ① Crossley, S. & McNamara, D. (2010). Cohesion, Coherence, and Expert Evaluations of Writing Proficiency. *Proceedings of the Annual Meeting of the Cognitive Science Society*, 32.
- ② Kobayashi, H. & Rinnert, C. (1996). Factors affecting composition evaluation in an EFL context: Cultural rhetorical pattern and reader's background. *Language Learning*, 46, 397-437.
- ③ Hirose, K. (2005). *Product and process in the L1 and L2 writing of Japanese students of English*. Hiroshima: Keisuisha.
- ④ Nakanishi, C. (2006). *A teaching approach to Japanese college students' EFL writing*. Tokyo: Keio University Press.
- ⑤ Sasaki, M. (2000). Toward an empirical model of EFL writing processes: An exploratory study. *Journal of Second Language Writing*, 9, 259-291.
- ⑥ 沢谷佑輔、横山吉樹、どのように作文課題の修辞法が学習者の注意と問題解決方略に影響をあたえるのか、HELES Journal、査読あり、7、2007年、3-16.
- ⑦ 鈴木智己、「英語学習における動機づけと英語能力の経年変化:高専生の英語学習意欲減退要因を探る」、第40回全国英語教育学会徳島研究大会、2014年
- ⑧ 田中博晃、廣森友人、山西博之、広瀬恵子、教育現場に根ざした英語ラ

イティング研究を目指して:英作文の指導と効果、大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要、査読あり、4巻、2007年、55-72

- ⑨ 森千鶴、実践的事例、全国英語教育学会第40回研究大会記念特別誌編集委員会(編)、『全国英語教育学会第40回研究大会記念特別誌:英語教育学の今—理論と実践の統合—』、2014年、140-150
- ⑩ Yamanishi, H.、Japanese EFL Learners' Use of Writing Strategies: A Questionnaire Survey、ACET 関西支部ライティング指導研究会紀要、査読あり、8巻、2009年、53-64
- ⑪ Cheng, Y. S.、A measure of second language writing anxiety: Scale development and preliminary validation、*Journal of Second Language Writing*、査読あり、13巻(4)、2004年、313-335.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 沢谷佑輔、鈴木智己、英語ライティングにおける結束性と評価の関係性—まとまりのあるライティングを目指した実践的研究—、HELES Journal、査読あり、15巻、2016年、35-54
https://www.jstage.jst.go.jp/article/helesje/15/0/15_3/_pdf

[学会発表] (計4件)

- ① 沢谷佑輔、鈴木智己、英語ライティングの方略使用がプロダクトの首尾一貫性と質に与える影響、第42回全国英語教育学会埼玉研究大会、2016年
- ② Suzuki, T. & Sawaya, Y.、Individual Differences in EFL Writing as Predictors for Writing Quality、37th Thailand TESOL International Conference、Bangkok、Thailand、2017年
- ③ 鈴木智己、沢谷佑輔、結束性と首尾一貫性に焦点をあてたライティング指導の効果—学習者の意識と作文はどのように変わったか—、第43回全国英語教育学会島根研究大会、2017年
- ④ Suzuki, T. & Sawaya, Y.、The Effect of Writing Instruction Focusing on Cohesion and Coherence: A Close Look at the Quality of Writing and Individual Learner Differences among Novice EFL Writers. The 16th Annual Hawaii International Conference on Education、2018年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 智己 (SUZUKI、Tomoki)
旭川工業高等専門学校一般人文科・教授
研究者番号：70342441

(2) 研究分担者

沢谷 佑輔 (SAWAYA、Yusuke)
旭川工業高等専門学校一般人文科・准教授
研究者番号：10733438